

# ディケンズとニューゲイト監獄

西 條 隆 雄

ニューゲイト監獄は重罪人を収容する監獄である。過去には債務者もここに投獄されていたが、1815年に債務者はマーシャルシー監獄およびフリート監獄に移され (Hooper 46), 以後は重罪人のみを収監するところとなった。死刑のきまった囚人は数日後に絞首台の露と消える。19世紀, 処刑は一種の見世物であり, 人々はこぞってこれを見物した。悪名高い罪人の場合など, さして広くない監獄前の Old Bailey Street は 3 ~ 10 万人の人々で埋めつくされ, 通りの向かいにある絞首台の見える家々は, 屋根の上にいるまで見物席を設けて見料を稼いだといわれる (Griffiths 426-29)。

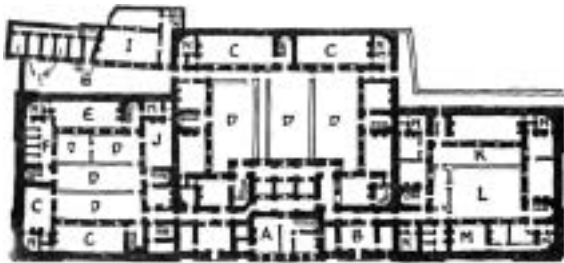
1660年の大火で焼失したとき, ニューゲイト監獄はニューゲイト・ストリーートの北側に位置していた。焼失後には敷地を広げ, 通りをはさんで南北に跨る形で再建されたが, ふたたびゴードン暴動によって焼失した (1780)。その後再建 (1783) された監獄は, 1857~62年間に大改造されるまで形状をそのままとどめている。西は Old Bailey Street, 東はマーケット・レイン (ニューゲイト・マーケットがある), 南は Sessions House と呼ばれる刑事裁判所に囲まれていて, 1783年に再建されたのを機に, それまでタイバーンで行われていた処刑がニューゲイト監獄前で執行されるようになった。これが公開死刑廃止となる1868年までつづく。ディケンズが眺め, 実際に探訪したニューゲイト監獄は, この再建された監獄である。ゴードン暴動を描く *Barnaby Rudge* (1841) の場合をのぞけば, *Sketches by Boz* (1836), *Oliver Twist* (1837-39), *Great Expectations* (1860) に描かれるニューゲイト監獄は, 再建された監獄と考えてよい。

## 1. Boz の見たニューゲイト監獄

少年のディケンズが目にしたニューゲイト監獄は, おそらく *Great*

*Expectations* の主人公 Pip が上京したときに見たものと同じであったろう (GE 155)。ジャガーズの法律事務所のある Little Britain (ちょうど道が直角に曲がる辺りにあった) からスミスフィールド市場にでて、そこを南下すると、セント・ポール大聖堂を背に黒々とした大きな石造建築物が立ちはだかる。これがニューゲイト監獄である。堅牢な厚さ4フィートの石壁が、無言のうちにその恐ろしさを物語る。その “this gloomy depository of the guilt and misery of London” (SB 201) である監獄をディケンズが実際に探訪したのは1835年11月5日である。その時の探訪記が、*Sketches by Boz* (1836) を二巻本として出版する際に、作品の一部として加えられた。監獄は入場料さえ払えば内部の様子をつぶさに見物することができた。1838年に描かれた平面図<sup>1</sup> によれば、建物の中央部に運動用の中庭 (D, K, L) をとり、右端は女性用監房、上端の狭い空間には死刑囚用の中庭 (G)，その左方には3階建全15室の独房 (9 x 6 フィート) が並んでいる。

見学ツアーは、所長室 (A) と二つ右隣の看守室 (B) に挟まれた奥の、「弁護士事務所、または商店の会計室」のような小さな部屋から始まる。入り口扉の上の二つの棚、およびその隣の戸棚の上には処刑された過去の殺人



A. Keeper's House with Chapel behind on 1st floor: B. Turnkey's Lodge: C. Prisoners' Wards: D. Open Yards: E. Infirmary: F. Separate Cells: G. Press Yard: H. Condemned Cells: I. Condemned Room: J. Visitors' Room: K. Women's Yard: L. Do. For Convinced Women with Their Condemned Room at M: Vent Areas at M. N.

犯の石膏製の頭が並んでいる。Mayhew はその中に Greenacre (1785-1837), Daniel Good, Courvoisier (1817-40), Lani, Mullins を認めている (Mayhew & Binny 595) がもちろんこれは1862年のことであり、ボズが訪ねた1835年当時はまだ犯行には及んでいなかった人たちである。凶悪な殺人犯の場合は、絞首刑が終わった後に頭を切り離し、石膏で形どりし、このような形で保存していたのである。ディケンズは Bishop (John Bishop, 1797-1831) と Williams (John Head, alias Thomas Williams, 1805-31) の名前のみをあげている (SB,

202)。この二人はつぎつぎに人をあやめては、新鮮な死体をすばやく解剖医に売りさばいていた凶悪犯である (Fido 140-58)。この二人以外にも殺人犯の首が並んでいた可能性はあろう。

ついで異様な光景は、監獄内の礼拝堂である。これは署長室の後方上階にあって、図版に見るように、礼拝堂中央の一段低いところには死刑囚席を設けている。その真中には黒い布で覆われた棺が置かれている。

Mark Herber によれば1817年には取り除かれたとあるが、これはどこまで信じていいものか。死刑囚席の異様さをボズは次のように記している。“[The object] rivets the attention and fascinates the gaze and [...] the recollection of it will haunt us, waking and sleeping for a long time afterwards” (SB 208-9). というのも、彼らは死刑の判決を受けるとその日から処刑日までの数日間(たいていは金曜日から月曜日まで)硬パンと水だけの生活を強いられ、処刑前日の日曜日にここに集められ、多くの見物人の見守る中で、特別説教 (“death sermon”) が行われるからである。つまり死人として生身のお葬式を施されるのである。

1845年には廃止になったものの (Gatrell 83), それまではこの残酷な場面が入場料をとって一般に公開されていた。年間の入場料収入は£300 に達するという (Gatrell 385)。物見高い人々は死刑囚が特別説教を聴いて泣き出したり、失神したり、あるいはふてぶてしい態度を示したり、生気を失くして痴呆状態に陥る



入口 (ILN, 15 February 1873)



礼拝堂 (1808)

さまを見て楽しんでいたのである (Griffiths 433-35)。

この儀式を執り行うニューゲイト監獄の教戒師 (ordinary) は、「丸々とした、しかめ面で、赤ら顔の」Rev. Henry Cotton で、年収は£ 400 (1834)、彼の仕事は刑の決まった囚人を日々独房のある press-yard を訪れ、死刑囚とともにすごしながら、罪を悔い改め、神に祈り、神を信じるよう説き勧める (Priestley 98)。通常、日曜日には10:30と15:00、週日は9:45にいろいろな囚人の間を回り、1日150~400人に信心をすすめるそう。俗に “a fire-and-brimstone clergyman” といわれ、神の怒りと地獄の業火の責めを激しく説き、とりわけ死刑直前の日曜日には礼拝堂に集まった死刑囚に “blood-curdling sermon” (Garret 388) を施したそうである。しかし、その熱意をこめた断罪の説教が逆に署長や監獄運営委員会の人々には否定的に受け取られ、軽蔑をこめた目で見られていたらしい (Griffiths 414-15)。

その説教のあらましにはめったに出会うことができない。Pierce Egan が John Thurtell (1774-1824) の逮捕から処刑に至るまでの過程をつぶさに記録したものの中に、説教の抄録があるので、それを抜き出して全体を推し量ることにしたい。Thurtell のときの教戒師は Mr. Franklin、彼は「神に祝福されたものは天国に、呪われたものは永遠に地獄の業火に投げ込まれる。これは恐ろしいことではないか。神の御前に呼びだされてその恐ろしい審判を受けるよりは、いまのうちに改悛をなさい」といった内容を語気はげしく説いて聞かせるのである。

...Suppose then, said he, that “you saw the heavens opened, and the Son of Man coming in great power and glory, and all his holy angels with him. Suppose that you heard the mighty cherubim, in burning rows, sounding the loud trumpet of archangels, and a mighty voice piercing the heavens and the earth—‘Arise, ye dead, and come to judgment!’ Suppose you saw the throne set, and the great Judge sitting upon the throne of his glory; and all nations gathered before him; and all the dead, both small and great, standing before God; the books opened, and the dead judged out of the things written in those books;

suppose you heard the respective sentences upon all mankind pronounced by the mouth of Christ himself: ‘Come, ye blessed of my Father, receive the kingdom prepared for you, from the foundation of the world!’ and, ‘Depart from me, ye cursed, into everlasting fire, prepared for the devil and his angels.’ “Would not this,” continued the reverend gentleman, “be an appalling scene? and did not the Gospel positively declare that it should come to pass?” He asked then, why was not that dreadful fact operative upon human conduct? Why, then, such insensibility to human interests—why stifle the voice of conscience—why labour to drown its cries, by the din and riot of worldly cares and pleasures?<sup>2</sup>

礼拝堂を過ぎ、監獄のもっとも奥まったところに行くとき細長い中庭 (Press Yard) がある。その奥は独房。窓は二重窓でドアの厚さは4インチ、寝具なしの簡易ベッドがひとつ置かれているのみである。日曜日、死刑囚は礼拝堂から帰ってくると、ここで眠れぬ夜を過ごす。そして翌朝にはセント・セパルカ教会の鐘が8時を打つと同時に、絞首台上で生涯を終える。

探訪記は、以上のように監獄内部をじつに克明に伝えている。それと同時に深い人間観察の目も行き届き、ボズの特徴が如何なく発揮されている。収監された人を外部の人が訪ねる場合は、面会用の檻に入った囚人の前にさらに鉄格子の柵が設けられている。その鉄格子の柵を挟んで、母子間で演じられる悲しいドラマをボズは鮮やかにとらえている。

女性監房では鉄格子の柵を隔てて、囚人である若い女性と、それを見舞うばかりを着た老婆が立っている。老婆は心の苦しみを訴え、娘に更正をすすめるか、あるいは悔悛するよう懸命に説くが、娘は母の願いには耳を貸さず、母の差し出すけなしの小銭をひったくると、あとは何の関心も示さない。周囲の女性たちの中にも、この哀れな母子の姿に関心を寄せるものはいないのだ。“Hardened beyond all hope of redemption” (204) と化した人間の姿である。

次いで、母子の立場が逆となり、投獄された老婆とそれを見舞う、寒さに震

えるあわれな娘の間にもまた、人間的な心の通いは見られない。母親は娘に弁護の手配を依頼するが、娘のほうは母の釈放などどうでもよい、むしろそのような手段で訴追者の手を逃れることができるかどうかを見極めたいがためにこれを引き受けている。親子とは名ばかりで、互いに対して何の関心も持たない。娘は母親の愛にふれることはなく、子供時代の楽しさや無邪気さも知らずに世間の冷たさの中で育ったので、普通の人間であれば心を動かす事柄もこの女性には通用しない。心温まる思い出などとは無縁な、別の人種になってしまった悲しい人間の姿である。

ボズは、人をかくも非情にする根本原因にさぐりを入れ、貧困社会の真底を覗く。つづいて監獄内の学校を訪ねてみると、そこにはスリで捕まったと思しき14人の子供が、14人とも絞首台と牢獄船行きの眼差しをしており、悔悛や恥辱は片鱗すら見せず、ニューゲイト監獄に入ったことを誇らしい偉業だと考えている。Donald Low や Rumbelow が実証する、リージェンシーの少年犯罪の実態をそのまま写し出している。

だが、こうした観察とは別に、死刑を翌朝に控えた死刑囚が、死の重圧によって引き起こされた幻覚に苛まれる描写は、若干23歳の筆とは思えぬ洞察力の鋭さを示している。これはルポルタージュの域を超え、死に怯える人間を究極状態においてとらえる、すばらしい文学である。死刑囚は礼拝堂でおそろしい説教を聞かされ、同席する他の囚人たちの見せしめにされた後、独房に戻る。万にひとつの刑の緩和を待ち望む人もあれば、それは頼りにならぬと腹をくくり、逃亡の手段をめぐる人もある。5時に独房に入ると、10時まで蝋燭の火はあるがあとは闇、そして翌朝7時には別室へ移動。そのあと“Birdcage Walk”（*Olive Twist* に “a gloomy passage” [429] と書かれている）と呼ばれる通路を通して「債務者の門」の正面に構築された処刑台上にのぼる。この通路はかつて法廷に出廷するときに歩いたが、このたびは死出の通路、つまり “Dead Man’s Walk” と呼ばれる所以である。



Birdcage Walk, or Dead Man's Walk

判決の下った死刑囚は、残された僅かの時間を、独房でどのような思いで過ごすのであろうか。“Conceive the situation of a man, spending his last night on earth in this cell” (212) と述べるボズは、死刑囚の心中に渦巻く狂おしい幻覚を追う。迫りくる死の重圧におびえる精神をその極限状態においてとらえるのである。

友人には助命嘆願の手を尽くさせ、看守にはあれこれしつこく要求してほとんど困らせ、教戒師の訓戒はことごとく無視した。いまや希望はすべて消え、死は目前。死の恐怖はほとんど狂気を引き起こし、逃れるすべのないことを知って自失状態となり、主の名を唱え赦しを乞う力もない。

こんな状況のもとで1時間、また1時間が瞬くうちに過ぎ去る。セントポール大聖堂の鐘が時を告げる。残るは7時間。額には汗がにじみ、体中は苦悶に打ち震え、機械的にバイブルを手にする。その汚れ擦切れた感触が、40年前に学校で学んだ本を脳裏によみがえらせ、当時の教室や遊び仲間たちを現出させる。忘れた一句が耳に響く。そのとき教戒師の声でわれに返ると、彼はまさに聖書の悔改めの一節を読んでいるところであった。愕然として崩れ折れ、手を合わす。突如、鐘の音が響く。あと6時間。

警戒と興奮に疲れ果てて眠る。眠っても落着かぬ精神状態は夢の中を追いかけてくる。心から大きな重荷がはずれ、何時しか彼は妻とともに楽しく原野を歩いている。妻は、かつて愛していたときのように――まだ貧困や虐待が彼女の容貌を変える前のように――彼の腕に身を寄せ、やさしく見上げている。今はもう殴ったりはしないと誓う。これまでの虐待にたいして赦しを求めたくなる。ところが場面は急変し裁判がはじまる。判事も陪審員もみんな同じで、傍聴席では誰も彼もが自分を睨んでいる。判決は有罪。かれは逃走を心に決める。

不思議なことに監獄の門は開いている。闇の中を駆け抜け、垣根や溝を軽々と飛び越え、ついに追っ手の届かぬところまで来ると立ち止まる。もう大丈夫だろう、土手で日の出まで一眠りしようと考えている。無意識の状態がしばらくつづく。寒さを感じて目覚める。混乱した顔を振りほどくや否や、現実が彼を直視する。あと二時間でこの世から消える。

メイヒューによれば囚人はこの幻覚にしばしば陥るというが、迫り来る死の重圧におびえる精神を描出する筆力はきわめて秀逸で、スケッチ・ライターの



域をはるかに抜きこんでいる。

## 2. *Oliver Twist* におけるニューゲイト監獄

*Oliver Twist* は新救貧法による救済制度のひどさを攻撃・諷刺する章と、犯罪世界の営みを描く章に二分される。ニューゲイト監獄はその犯罪世界のただ中にそびえ、犯罪を思いとどまらすべく、厳重な監禁とそれにつづく極刑を与えて犯罪者をひるませる。1829年の都警法によってロンドンの治安は改善されたとはいえ、少年の手下たちをたくみに仕込んで荒稼ぎする狡猾な故買は数多く存在し、その典型がフェイギンの姿として描かれる。

「ずいぶん年寄りの、皺だらけのユダヤ人」(56) と書かれたフェイギンは、己の保身を「自然の第一法則」(66) と考え、手下に厳しい服従を強いる一方、たとえ絞首台に立つことになっても誇りと強がりを見せ、英雄として消えてゆくことを教えている。オリヴァーが一味に迎えられた翌朝、手下の少年たちが稼ぎに出かけてゆくと、彼は宝石箱を取り出して眺めつつ、こう呟く。

“Clever dogs! Clever dogs! Staunch to the last! Never told to the old parson where they were. Never peached upon old Fagin! And why should they? It wouldn't have loosened the knot, or kept the drop up, a minute longer. No, no, no! Fine fellows! Fine fellows!” (OT 59)

ここに述べる“old parson”とはニューゲイト監獄の教戒師である。彼は、神のみ前で裁きを受けるより何もかもすべて白状し、心を軽くしてあの世へ旅立つことをことば激しく執拗に説く。だが、そのような説教も少年犯罪者には何の効果もない。フェイギンは「賢いやつらだ、隠れ家を告げはしなかったし、この老フェイギンを裏切ることもしなかった」とほくそ笑んでいる。摂政時代の特徴といえば、犯罪の若年化現象であった。6歳で親に捨てられると、8、9歳までにはすでに一人前の犯罪者になっており、絞首台に上る20人のうち18人までは21歳未満であったといわれる (Low 63; Rumbelow 101)。

1783年にニューゲイト監獄前に処刑場が移されてからは、組み立て式の絞首台が用いられた。絞首台の中央には落とし戸ふうの台座 (縦横10×8 フィート)



が床より 6 インチ高く上っていて、レバーを動かせば台座は瞬時にして落下する仕掛けになっている (Griffiths 422)。上方には平行な二本の横木を渡し、これにいくつかの吊り紐を取り付けて、数名を一度に吊せるようになっている。第一回目の絞首刑は1783年12月 9 日、10名が一度に吊された。Fagin はのちに独房に投げ込まれたとき、このように思いを廻らしている。

With what a rattling noise the drop went down; and how suddenly they changed, from strong and vigorous men to dangling heaps of clothes! (*OT*, 407)

自分を裏切ることのないまま、手下をうまく葬り去ったフェイギンではあったが、このたびは逃れようのない極刑がふりかかる。

罪を少年犯罪者に負わせて “Fine fellows” と目を細める Fagin も、絞知にたけた策略をいつまでも保持しつづけることはできず、ついに殺人幫助罪で捕えられ、ニューゲイト監獄に投獄される。その彼が “accessory” (383) として裁きを受ける法廷の場面は、判事、陪審、傍聴人一人一人の表情がまるで点描されるかのように、冷静かつ客観的に描かれている。傍聴席は床から天井まで顔また顔で埋まり、“inquisitive and eager eyes” が被告を凝視する。そこには憐れみの色はまったく無く、有罪判決の下のを待ち望む目だけであった。

...in no one face—not even among the women, of whom there were many there—could he read the faintest sympathy with himself, or any feeling but one of all-absorbing interest that he should be condemned. (*OT* 404)

やがて陪審員が別室協議のために退廷しふたたび戻ってくるまでの間に、Fagin のつぶやきとも思われる一言が挟まれている。

There was an old fat gentleman on the bench, too, who had gone out, some half an hour before, and now come back. He wondered within

himself whether this man had been to get his dinner, what he had had, and where he had had it. (*OT* 405)

これは中央刑事裁判所で法廷が開かれている期間中、月曜日と水曜日の午後 3 時と 5 時にロンドン市長および二人のシェリフによって判事をはじめとする人たちに饗せられる豪華な食事である。判事がワインをたらふく飲んだあと判事席に戻って死刑を宣告することは珍しいことではなかったらしい。もちろん宣告をいい渡したあとは、ふたたび食事をつづけるのである。貴顕にまじって教戒師も下座に同席を許されていて、Rev. Cotton は双方の食事に定刻に参加し、これをすべて平らげる健啖ぶりを示したという (Gatrell, 384).<sup>3</sup>

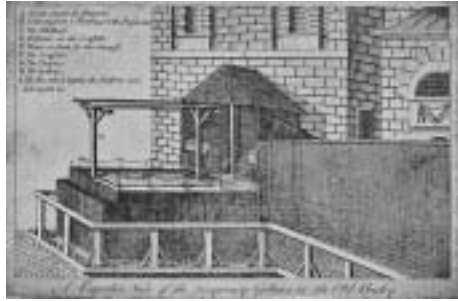
荘重な法廷描写の中に、このようなエピソードを読者に想像させるのは、内部事情に明るいジャーナリスト・ディケンズのなせる業であろう。やがて法廷でふたたび審議が始まる。フェイギンに有罪の判決が下る。それは法廷内にどよめきを引き起こし、そのどよめきは“angry thunder”のごとくに高まって行く。彼は独房入りとなり、処刑は月曜日に決まった。独房に監禁された Fagin に死が刻々と近づく。彼は処刑台に思いをめぐらす。焦燥、恐怖、絶望がしだいに大きくなる。それまで闇を渡り歩いた Fagin が、夜の到来とともにいたたまれなくなり“Light, light!” (407) と叫びながら激しくドアを叩く。

The day passed off. Day? There was no day; it was gone as soon as come—and night came on again; night so long, and yet so short; long in its dreadful silence, and short in its fleeting hours. (*OT* 405)

時を告げる鐘は“knell”となり、“Day”（日）はめぐって来ても彼にはもはや“Day”（昼）はない。時は物理的な時ではなくなり、処刑執行の到来を告げる観念的な時となって、フェイギンを恐怖と闇でつつみ、焦燥に駆り立てる。形相もいまや人間の形相ではなく“snared beast” (409) のそれとなる。精神は錯乱を来たす。一時、オリヴァーとブラウンロウ氏が訪ねてきたとき、一緒にここを脱け出せるかと錯乱した頭の中にも期待をつないだが、それも無残に断ち切られたいま、時々刻々人間の姿からなにか下等な動物に成り下がり、絶望

の叫びを獄中にとどろかせて、崩れ落ちてゆく。Fagin の最期は、Sikes の場合に劣らず内景描写にすぐれ、作品の白眉となっている。

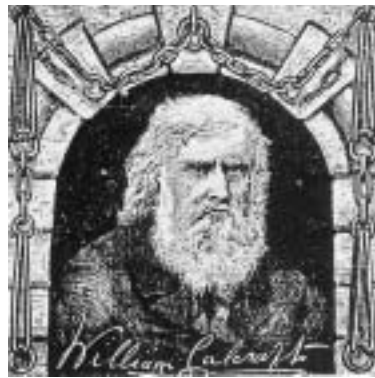
そのようなフェイギンとは無関係に、処刑台の組み立ては着々とおこなわれている。



絞首台

Day was dawning when they again emerged. A great multitude had already assembled; the windows were filled with people, smoking and playing cards to beguile the time; the crowd were pushing, quarrelling, joking. Everything told of life and animation, but one dark cluster of objects in the centre of all the black stage, the cross-beam, the rope, and all the hideous apparatus of death. (OT 411)

処刑台は午後10時に監獄の倉庫からひきだされ、20人の職人の手で組み立てられる。処刑場には朝の3時頃にすでに4,5千人の群集が詰め掛け、6時には立錐の余地もないほどの混雑となる。7時には死刑執行人が到着する。執行人の名はWilliam Calcraft (1800-79) で、1829年より74年まで、45年間この職を務めた。週給25シリングで、処刑執行ごとに1ギニー（シティー外で執行する場合は10ポンド）の特別報酬が与えられた (Abbott, 259-260)。フェイギンにはもはや死を逃れるすべはない。踊り狂う群衆のただ中に処刑台のみが非情なまでにクロズ・アップされる。



William Calcraft

### 3. *Great Expectations* におけるニューゲイト監獄

以上に見るように、前期二作品において、ニューゲイト監獄は探訪の正確さ、秀逸さ、あるいは劇的効果をおさめているものの、作品全体の中で中心的な役割を果たすには至っていない。それは、作家が作品の構成というものを深く意識していない時期に書かれたことと関係している。それに対して、円熟期に書かれた *Great Expectations* においては、ニューゲイト監獄が主人公の運命に根本的に関わり、本人の知らぬところで彼を操っている。5年前に書かれた *Little Dorrit* において、Marshalsea 監獄の生活が Mr. Dorrit の性格を歪め、価値倒錯の世界を作り上げたと同じように、*Great Expectations* において Pip に付きまとうニューゲイト監獄の陰は、彼が夢みる紳士階級に向かって一歩踏み出すと、決まってその期待を裏切り、彼を皮肉な現実に戻す。

第1章墓場の場面で、Pip は脱走した囚人により墓石の上に押し倒されて逆さ (“turned me upside down” [GE 2]) にされたが、この「逆さ」ということが一貫して作品のモチーフとなっている。つまり、大いなる遺産は Pip の思い込みに外ならず、後に展開するさまざまな出来事によって、その思い込みとは逆の事実が現われる。脅かされて食物とヤスリを盗んでからというもの、彼の行動には常に罪意識が伴い、それが消えることはない。その彼の意識をニューゲイト監獄と結び付けているのはディケンズのすばらしい想像力で、紳士になろうとすること自体が犯罪と不即不離の関係にあることを物語っている。

例えば、ハヴィシャム邸にはじめて奉公して一、二日たった時、彼はバブで見知らぬ人からお金を受取った。その時、彼の胸ポケットに例のヤスリを見て Pip は恐愕するし (72)、紳士修業のためにロンドンに出てきた Pip が目にするのは、紳士にふさわしい環境ではなく、セント・ポール大聖堂を背にたちだかるニューゲイト監獄であった (155)。彼の期待 (“expectations”) には絶えずニューゲイト監獄の影がちらつき、作品中に “expectations” ということが出てくるたびに、期待と現実の落差が主人公の前に現出するのである。Estella が屋敷に帰ってきたからとミス・ハヴィシャムから知らせを受けて、Pip は田舎へ急行するが、乗った馬車には、以前に1ポンド紙幣2枚につつんだシリング銀貨を仲介した convict の一人が乗り合わせ (216-17)、Pip は自分が当人で

あることを見破られはしないかと怯えながら旅をし、田舎で Estella に再会する。その彼女が「自分の心には思いやるとか涙もろさというものはないのです」(224) と述べたとき、その顔にどこか見覚えのある面影を認める。Pip には、何であるのか分からないが、これが母親 Molly の面影であることは後に分かる(369-70)。

Pip の Estella への思いは常に囚人やニューゲイト監獄と結びついている。Estella がロンドンにやってくるというので、Cross Key's Inn まで出迎えに行ったときもそうである。あまりにも早すぎたので、ほんの暇つぶしのつもりで Jaggers の法律事務所に立ち寄ると、Wemmick は彼をニューゲイト監獄に案内し、二人は Jaggers の依頼人たちを見て歩く (246-49)。このとき Pip は Jaggers の成功の秘密をはじめて知ったようだ。しかし Pip は自分がなぜ “taint of prison and crime” (249) に包まれているのかを思わずにはいられない。美しい Estella に会ってこの思いは一瞬のうちに吹き飛ぶが、やがて Estella を見送るとき、彼女が振る手を見て、Pip に “nameless shadow” (250) が降りかかる。だが Estella と Newgate 監獄が結びついていることにはまだ気づかない。

そしてついにある嵐の夜、Pip が23歳のとき、Magwitch が彼を訪ねてくる(299)。自分に gentility を与えたのは、むかし沼地で助けた囚人であったことが判明し、ここに至って Pip はようやく幻想から覚める。

同時に Pip は、Estella の振る手が Jaggers の法律事務所に仕える Molly の手であることに思い至る (369)。Estella は Molly の子供であったのだ。Pip が夢みる華やかで上品な、教養ある世界は、犯罪世界と微妙に結ばれていたのである。夢と挫折を通してかれは人生の真相を直視する。

その覚醒を契機に、Pip の生き方が変わる。Pip を一目見るために死を覚悟で帰国した Magwitch をみて、最初こそは拒絶しつづけたものの、表面の背後にかくれた心情の美しさに目を開く。それまでどっちつかずであった人生に、はっきりとした考えと行動がようやく見えはじめる。Miss Havisham を欺瞞と復讐の人生から立ち直らせ (377-82)、Magwitch の国外逃亡に手を貸し、臨終の彼に「お嬢さんを愛しています」(436) と述べて、恩人を安らかな死の眠りにつかせている。

For now, my repugnance to him had all melted away, and in the hunted wounded shackled creature who held my hand in his, I only saw a man who had meant to be my benefactor, and who had felt affectionately, gratefully, and generously, towards me with great constancy through a series of years. I only saw in him a much better man than I had been to Joe. (*GE* 423)

紳士への道は、実は、忘恩の道であった。ロンドンへ出立するときも、Joe が Pip をロンドンに訪ねてきた時も、彼は忌み嫌うように Joe と距離を保つ。「できることならお金を払って追いつきたいと思う」(205)。その Joe の純真無垢な心と愛情に気づくのは、重病に取り付かれ、こんこんと眠っている間に Joe の献身的な看病を受けたときである。錯乱状態から覚めたときにそばにいた Joe に対して Pip はこう述べる。

And as my extreme weakness prevented me from getting up and going to him, I lay there, penitently whispering, “O God bless him! O God bless this gentle Christian man!” (*GE* 439)

出自ゆえに距離をおき蔑んだ Joe こそは、自分が追い求めていた「紳士」であったことに気づき、Pip はこれまでの傲慢さを恥じる。紳士と呼ばれるにはもちろん領地と血筋が不可欠ではあるが、世紀半ば頃から医師、弁護士、公務員、技師などの職業にあって騎士道の理想を体現している人々に対し “gentlemanly” ということばが使われるようになる (Mitchell 325-26, Paroissien 152-52, 165-66)。 *Great Expectations* の書かれた時期は新しい意味での “Victorian gentleman” という概念が誕生する過渡期であった。Joe を称える Pip の “gentle man” ということばに、階級をこえて、心情の美しさと気高さを意味する「紳士」像を読み取って間違いはないであろう。

なお、ジャガーズの事務所には恐ろしい顔をした石膏像が二つある。これは著名な犯罪人が処刑されたとき、石膏の胸像をたくさん作りこれを販売することがあった。ジャガーズは処刑が分かっているのにやむなく依頼されて凶悪犯

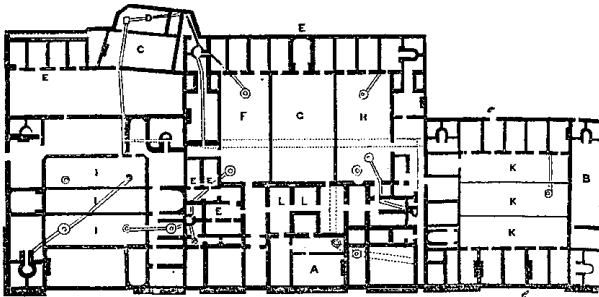
を弁護し、処刑後、自らの初仕事の記念としてその依頼人の石膏胸像を事務所に飾った。そのためにいかがわしい人々から弁護以来が殺到し、辣腕と弁護の巧みさで名声と富を手にした。だが彼自身は、たえず「毘をしかけてかかってくるのを待ちかまえる」、人間感情とは無縁な生活を送っている。彼にとって“expectations”の見返りは、人間性を凍結し、依頼人を弁護するためには多少なり法を犯すことも敢えて行う、弁護士稼業であったようだ。

## 注

ディケンズ作品の引用は The Oxford Illustrated Dickens 版を用い、ページ数を ( ) 内に示す。

1. 'Newgate, from Britton and Pugin's "Public Buildings of London" (1838)' in *A History of Everyday Things in England*, vol.3 (1933), p.51. なお、下記の図面も参照されたい (Mayhew & Binny 596)。

GROUND PLAN OF NEWGATE JAIL BEFORE THE RECENT ALTERATIONS



- |                         |                            |   |
|-------------------------|----------------------------|---|
| A. Governor's Office:   | E. Day and Sleeping Rooms: | H. Another ditto:                         |
| B. Matron's Apartments: | F. Chapel Yard:            | I. Yards for Convicts and Boys:           |
| C. An Associated Room:  | G. Middle Exercising Yard: | K. Female Exercising Yard:                |
| D. An Airing Yard:      | for untried Prisoners:     | L. Passage along the interior of the Jail |

2. *The Trial of John Thurtell and Joseph Hunt*. London: Hodgson & Co., 1824.

## THE CONDEMNED SERMON

"We must all appear before the judgment-seat of Christ, that every one may receive the things done in his body, according to that he hath done, whether it be good or bad."

The Rev. Chaplain said, that in the beginning of the chapter, St. Paul expressed an earnest desire to quit this earthly tabernacle for a house not made with bands, and to be present with the Lord; but that, however the Almighty should dispose of him, he should make it a constant labour and study so to conduct himself, that both in this world, and at his presentation in the next, he might hope to be approved and accepted by his God, and that to this end his actions were daily governed and directed. He then enforced upon the prisoners the simple and



expressive rule of St. Paul, and emphatically pointed out the force and value of attention to it. He implored the prisoners to consider the certainty of a future judgment. Not to dwell on the persuasion and belief of all Heathens and Pagans in every age and country, in this respect, on the dictates of every man's natural conscience, his self-approbation of secret virtue, his self-condemnation of secret vice; the hopes and fears that agitate every man's breast on account of his most private actions, and the inmost thoughts of his heart, were all, he said, so many proofs of his belief in a future judgment.

In the second place, he said, that neither was it necessary to take an extensive view of the unequal distribution of happiness and misery in this life: how virtuous and holy men were often afflicted in this world and that too, even for righteousness sake: and that profligate, daring, and impious men, often flourish and prosper—they came not into trouble, neither were they plagued like other men; hence the justice of God seemed to require, that at the final consummation of all things this seeming injustice should be rectified, and that God would one day fully vindicate the righteousness of his government, acquit the honour of his justice; and that there would be held a general assize of all men that ever breathed on the face of the whole earth, when they would all have a fair and open trial, and God would render to each according to his works. The Chaplain then enforced the truth of the divine judgment, and after making a powerful impression upon his auditory by the eloquence of his argument, he exclaimed, "Hear the words of your Redeemer : 'The day is coming, in which all who are in their graves shall hear the voice of their Judge, and shall come forth; they that have done good, unto the resurrection of life; and they that have done evil, unto the resurrection of damnation.'" He remarked upon the astonishing indifference of some persons to the divine declaration, and the impossibility of their conducting themselves in the manner some did, were they impressed with its truth. He was particularly solemn and impressive in dwelling upon the profligacy and profaneness of some, who were not deterred by a sense of religion from the commission of sin; just as if eternal justice were asleep—just as if all their wicked actions would be buried with their dead bodies, and should never rise again in judgment against their immortal souls. He contrasted with such impious indifference the calmness, the consolation, and hope of a true Christian, who built his hope on the fundamental belief of happiness hereafter, and illustrated the value of such a hope by the practice of St. Paul, and the serenity and piety of his life. The Chaplain then said, that it would be easy to draw a terrific picture of the great and terrible day of judgment; but he preferred the arguments which cool reason suggested, to those which terror and amazement inspired. He invoked the attention of the prisoners to the plain and powerful expression of the Holy Scriptures.

Suppose then, said he, that "you saw the heavens opened, and the Son of Man coming in great power and glory, and all his holy angels with him. Suppose that you heard the mighty cherubim, in burning rows, sounding the loud trumpet of archangels, and a mighty voice piercing the heavens and the earth—'Arise, ye dead, and come to judgment!' Suppose you saw the throne set, and the great Judge sitting upon the throne of his glory; and all nations gathered before him; and all the dead, both small and great, standing before God; the books opened, and the dead judged out of the things written in those books; suppose you heard the respective sentences upon all mankind pronounced by the mouth of Christ himself : 'Come, ye blessed of my Father, receive the kingdom prepared for you, from the foundation of the world!' and, 'Depart from me, ye cursed, into everlasting fire, prepared for the devil and his angels.' "Would not this," continued the reverend gentleman, "be an appalling scene? and did not the Gospel positively declare that it should come to pass?" He asked then, why was not that dreadful fact operative upon human conduct? Why, then, such insensibility to human interests—why stifle the

voice of conscience—why labour to drown its cries, by the din and riot of worldly cares and pleasures?

After dwelling forcibly on this topic, the reverend gentleman exclaimed—"Let this present season of Advent constrain us all to look carefully and steadily to our last great account; and seeing now, with our own eyes, the awful spectacle before us, where human justice is about to vindicate the violation of her laws, let us lift up our hearts to higher views, and raise our thoughts from earthly to heavenly subjects. Let us argue thus:—If the day of God's judgment be so dreadful at a distance, that I can hardly now bear the very thought of it, from the recollection of my sins, how insupportable will the thought itself be, when it eternally does come!" He, in conclusion, contrasted the times of ignorance of the heathen and the Christian world, and, as St. Paul said, "the ignorance of the former God winked at, but now all men were commanded to repent, because he hath appointed a day to which he will judge the world." "Oh, then, at once," said the Chaplain, with great fervour and earnestness, "repent! let the wicked forsake his ways, and the unrighteous man his thoughts; and let him turn unto the Lord, who will have mercy upon him, and unto our God, who will abundantly pardon, through the merits and mediation of Jesus Christ, our Lord and Saviour."

Repeatedly, during the delivery of the sermon, the Chaplain was affected to tears. Thurtell at times evinced uncommon emotion—his manner was extremely penitent, but his fortitude was still maintained, and he awaited with composure his impending fate. He hoped, he said, to greet it with the firmness of a man, and the resignation of a Christian.

In the course of the service, the Chaplain read the Litany, though out of order, very properly judging there were parts in it more applicable to the ease of the prisoners than occurred in the rest of the service.

When the following prayer was read, Hunt seemed dreadfully affected, and his head dropped upon the front of the pew:—

"That it may please Thee to defend and provide for the fatherless children and widows, and all that are desolate and oppressed."

It was originally proposed to try the prisoners in irons; but Mr. Taylor, the barrister, represented to the High Sheriff the illegality of such a proceeding, and the intention was in consequence abandoned.

A meeting of the magistrates was held on Wednesday morning, at which the place where, and the time when, sentence should be executed upon Thurtell, was taken into consideration. It was finally resolved that the culprit should be executed at twelve o'clock on Friday noon in front of the centre door (which is called the "Mill," or "Tread-mill-door") of the gaol, and not in the field or gravel-pit, opposite the prison, where malefactors are usually executed.

The whole armed power were summoned to attend on this occasion. The magistrates, with great propriety, directed Bishop, Ruthven, and Upton, of the Bow-street establishment, to remain until the behests of the law were complied with.

Thomas Thurtell, on Thursday afternoon, took his last farewell of his unfortunate brother. This scene was singularly solemn and affecting. John Thurtell appeared to feel with strong sensibility, the awfulness of his situation. He grasped his brother by the hands and pressed them with force and fervency. His expression was, "God bless you, Thomas. There are now nine of us; by this time to-morrow there will be but eight!" The latter part of the sentence was delivered in a tone in which the firm and pathetic were equally mingled.

Hunt's execution is fixed for January 22d, if the application to the Crown, in behalf of the prisoner, should not prove successful. Fourteen days are, we understand, allowed by law to accessories in cases of murder; and therefore the High Sheriff has named the day which we have

mentioned.

Mr. Clutterbuck, the magistrate, was in close conference with Thurtell for a considerable length of time at Thurtell's own particular desire. The subject of the conference, it is said, related to matters of a private nature.

In the course of the evening two gentlemen arrived from Cambridge, to inquire respecting any information which Thurtell could give on the subject of the disappearance of the Rev. Mr. Colton. The object of their inquiry was to ascertain, for the purposes of the College, whether Thurtell could furnish any information which might possibly prevent the lapse of the living from devolving upon the diocese. Thurtell's answer to this application was, that he knew nothing of Mr. Colton.

At ten o'clock on Thursday, Probert, having been informed that he was at liberty to depart, left Hertford gaol, in which he slept on the preceding night. As he was about to quit the gaol, one of the turnkeys, of whom he had borrowed two or three shillings, stopped him, and insisted on being paid; but it was not without some hesitation that he discharged the debt. Before Probert had proceeded far from the gaol, he met his wife, Miss Noyes, and Thomas Noyes. Their recognition of each other was cold; and, after conversing for a few minutes, Probert left the party, and proceeded in an opposite direction to that which they took. He was afterwards seen walking round the town with a man of respectable appearance. He himself was well dressed, and walked with a swaggering air.

The High Sheriff issued directions that no person whatever should be admitted to Thurtell, it being his wish to be kept perfectly composed.

(*The Trial of John Thurtell and Joseph Hunt.*)

3. Hooper によれば, 1807- 8 年には 3 回 (月, 水は延べ19日間) の開延期に食事が饗され, 1 日あたり ￡35, 計 ￡665 の支出が行われた。この間, 飲んだワインは145ダースにのぼり出費は更に ￡450 の追加となった。この悪しき習慣は1877年までつづき, その時までにはずいぶん改められたものの, 当時の “a great scandal” であったという (Hooper 130-134)。

## 参考文献

- The Trial of John Thurtell and Joseph Hunt.* London: Hodgson & Co., 1824.
- Abbott, Geoffrey. *The Book of Execution: An Encyclopedia of Methods of Judicial Execution.* 1988.
- Bailey, Brian. *The Guinness Book of Crime.* London: Guinness Publishing Ltd., 1988.
- Cooper, David D. *The Lesson of the Scaffold.* Athens: Ohio University Press, 1974.
- Fido, Martin. *Body Snatchers: A History of the Resurrectionists, 1742-1832.* London: Weidenfeld & Nicolson, 1988. 140-158.
- Gatrell, V. A. C. *The Hanging Tree: Execution and The English People 1770-1868.* Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Griffiths, Arthur. *The Chronicles of Newgate.* 1883; rpt. NY: Dorset Press, 1987.
- Herber, Mark. *Criminal London: a Pictorial History from Medieval Times to 1939.*

- Chichester: Phillimore, 2002.
- Hooper, W. E. *The History of Newgate and The Old Bailey*. London: Underwood Press Ltd., 1935.
- Low, Donald A. *Thieves' Kitchen: The Regency Unerworld*. London: J. M. Dent & Sons, 1982.
- Mayhew, Henry & John Binny. *The Criminal Prisons of London and Scenes of Prison Life*. London: Charles Griffin and Co., 1862.
- Mitchell, Sally ed. *Victorian Britain: an Encyclopedia*. London: St. James Press, 1988.
- Paroissien, David. *The Companion to 'Great Expectations.'* East Sussex: Helm Information Ltd., 2000.
- Priestley, Philip. *Victorian Prison Lives*. London: Methuen, 1985.
- Rumbelow, Donald. *I Spy Blue: The Police and Crime in the city of London from Elizabeth I to Victoria*. Bath: Cedric Chivers, 1971.
- Shaw, A. G. L. *Convicts and the Colonies*. London: Faber and Faber, 1966.